



みなとメディアミュージアム 2016 記録集



開催概要

みなとメディアミュージアム(以下、MMM)は、茨城県ひたちなか市ひたちなか海浜鉄道湊線沿線を舞台に開催する現代アートプロジェクトです。webなどを通じて全国からアーティストを募集し、コンペティションののち出展者と作品を決定します。出展された作品は会期中(8月中、約3週間)、那珂湊の駅やまちなかを中心に、ひたちなか海浜鉄道沿線や車内にも展示されます。ワークショップの企画・運営も行います。「産(那珂湊地区商店街、ひたちなか海浜鉄道湊線)+学(大学生・大学院生・大学教員)+芸(アーティスト)」の三者からなる実行委員会により運営されており、芸術表現と地域との協働によるまちの活性化を目的として活動しています。2009年に第1回を開催し、今年度で第8回の開催となりました。

日程 2016年8月7日(日)・8月28日(日)
10:00~18:00(最終日のみ16:00まで) ※毎水曜休み ※観覧料無料

会場 茨城県ひたちなか市ひたちなか海浜鉄道湊線沿線地域(ひたちなか海浜鉄道那珂湊駅周辺)

アクセス JR上野駅から常磐線特急ひたち・ときわで約80分→JR勝田駅からひたちなか海浜鉄道に乗り換え約15分→那珂湊駅

主催: みなとメディアミュージアム実行委員会

共催: 宝塚大学東京メディア芸術学部、常磐大学

後援: ひたちなか市、ひたちなか海浜鉄道株式会社、おらが湊鐵道応援団、ひたちなか商工会議所

テーマ

みなとメディアミュージアム(MMM)は今年で8年目となった。アートを通じて、よそ者であった私たちも那珂湊に受け入れてもらってきた。しかしMMMは那珂湊に本当に根付いているのだろうか? この問いを明らかにするため、テーマを「浸透」とした。

このきっかけは去年のMMMの大賞を受賞した作家の活動にある。これまでにないほど地域と結びつき、制作を行う姿を見せてくれた。私たちは那珂湊に教わり、参加作家とともに常に深化しなければならないと強く感じた。

那珂湊駅やまちの中で、そして小学校でのワークショップで、作家と私たちは那珂湊の人々に支えられながら、那珂湊にアートで入り込んだ。

湊線に乗ることも、ホームに降りることも、まちを歩くこともアートの体験となるように。

アートが浸透して日常の視線を変えるように。



INDEX

00 アートマップ

01 開催概要
テーマ

02 INDEX

03 代表のことば／浅野嶺

展示作品紹介

04 「構造の表象」後藤宙

06 「プラスチック プラクティス」白田那智

07 「halo003」ろくいち

08 「那珂湊松物語」木内祐子

09 「き、こえ。ないのは、誰か」ツチ屋サユリ

10 「『飛梅・飛松伝説』（とびうめ・とびまつでんせつ）」小山和則

11 「みなとを編む」對馬尚

「Lead」サユリニシヤマ

12 「カモメをつくろう 2016」松井ゆめ

13 楽しいスケッチ会

「ARTRAIN-アートレイン-」アートレイン(安田学園中学校・高等学校美術部)

14 「あなたの隣」白石綾

15 「夜空のカーテン」蛭田香菜子

16 「対峙した 場所」森田柁

17 「episode」山本大樹

18 「BANKOKKI」43

19 「那珂湊はいいぞ!」中村やす

20 「那珂湊DC ヘッドマークワークショップ」宝塚大学植松研究室デコるファミリー

22 「なづけ・ワークショップ『なまえのスーパー』」四千の日と夜プロジェクト

23 「laminare」金井啓太

「かっぱのきもち」伊藤沙織

24 おさむシアター

25 受賞者一覧

審査員総評／海老原祥子

26 MMM同窓会2016

MMM過去8年の歩み

27 チーフキュレーターから／橋口静思

28 プロデューサーから／中村泰之

MMM、始めませんか。あなたも。／田島悠史

MMM2017に向けて／橋口静思

代表のことは

日差しは眩しいけれど、海風が吹き込む素敵な港町、これが2014年夏に初めて那珂湊駅のホームに降りたときの印象でした。みなとメディアミュージアム(MMM)2014に作品を出展したことがMMMと私の最初のつながりです。祖父母が赤塚在住という茨城との縁があり、スムーズに活動ができました。MMMに展示作家として関わる中で、「こんなにMMMには可能性があるのに、今のままではもったいない！」と思い、運営に携わるようになり、MMMの2015・2016年度の代表を務めました。

私は、MMMはもっと地域と繋がって、地域に役立つものにしたいと考えていました。そこで、子どもたちが特つなりに注目で始めたのが、那珂湊第一小学校でのワークショップです。まだ図工の授業でしか美術に触れたことがないだろう小学校の子どもたちと、制作・展示を続けてきたアーティストさんがいっしょに作品を築き上げるというめったにない機会です。

ワークショップを通じてアートに対する親しみや、自分の街への愛着を持ってもらうことが狙いです。子どもたちは未来の地域を支える重要な存在で、その親や家族、学校そのものを通じて地域とつながっています。だからこそ子どもたちを対象にして活動を行い、さらに子どもたちの手が加わった作品を街中に展示することで、長期的かつ広い範囲にMMMの効果をもたらすことができるのではと考えました。

子どもたちが笑顔で楽しそうに作品を作るのを見たときは、本当にやりがいを感じました。この街でMMMに触れた子どもたちのうちの何人かが、いつかこれをきっかけにアートに興味を持ったり、自分の街に魅力を感じて何かを始めたいと思ってくれば嬉しいです。

ここまで活動続けるのに、本当にたくさんの方々の地域の方々、スタッフのみんな、先生方にお世話になりました。ひたちなか市の方々と連携も進んできています。MMMはこうした方々の支えなくしては成立しません。色んな方々の支えとつながりのなかで生まれてくるからこそ、MMMには意味があるのだと思います。自分が代表の代は終わりますが、MMMそのものが、那珂湊・来場者・私達スタッフを深くつないで、またお互いに感謝しあい、「また来年も」と言い合えるような存在になってほしいと強く願っています。それこそがMMMが本当に「浸透」した時のはずです。

MMM2016代表 浅野嶺



■ 後藤 宙





構造の表象

百華蔵の壁にある木の連なり、梁、鉄扉、排水溝、開口部らしき鉄格子。
この空間の印象を決定付けるのは間違いなく壁の木の連なりである。
私はとにかくこれと対峙することを考えた。
無口でいて饒舌な場の要請を捉え、逃さないように手を動かす。場は完
成を待つ。私は手を動かす。

シンプルだ。

しかしこのセッションは始まりながらに完成しつつ終わりを迎えると同
時に過去のものとなる。

それゆえ作品の完成は実は私の時間の中にしかないかも知れない。だが、
ここにある事物のコントラストにしか対峙の軌跡を語ることはできない。

複雑だ。

profile

1991年 東京生まれ。東京藝術大学
大学院美術研究科先端藝術表現専攻
在籍。アーティスト。主なメディア
として糸を使った彫刻やインスタ
レーション、平面作品を展開する。
規則性や連続性の中にある普遍的な
美しさに恣意的な変化を与えること
によって作品化している。最近では専
ら構造に興味がある。

■ 白田 那智



プラスチック プラクティス

那珂湊で300年の歴史を誇る八朔祭りは、今年から隔年での開催が決まった。

八朔祭りの取材を通し、伝統への理解や、伝統を守ることがなぜ大切であるのかを、考えるようになった。

映像で見る、八朔祭りに参加する子どもたちはとても無邪気で、きっと祭りの意味は分らない。

しかし毎年参加することで、子どもたちの心の中に「伝統」が根付いていくのか。

八朔祭りをよく知らない、よそ者の私が作る風流物の山車は、きっと中身のない見せかけのものになるだろう。

形から入ることで、伝統を築くことが出来るなら、見せかけの山車をつくるという行為が、少しでも多くの町の人にとっての、八朔祭りや伝統を再考するきっかけになれば良いと願う。

profile

1991年生まれ東京都出身
2014年 武蔵野美術大学日本画学科
卒業

刺激の強い色や、廃材などの様々な素材を多用し、狂気のイメージを視覚的にむき出しにする。

一見してみると「怖い」印象を、造形的に作り込むことで超越したら、見た人が明るく元気になると確信をもって制作を行っている。

ろくいち



halo003

那珂湊の街には海があり、海の音がある。

それがこの街の人にとっての日常ではないだろうか。

那珂湊の海を見たとき、私たちの作業部屋のそばを走る環状七号線が想起された。

ある時、環七を行き交う車の音が、寄せては返す波の音のように感じられた。

それは私たちに浸透した日常の音であるように思えた。

双方の音を光の波紋で可視化し空間に満たしてみようと思う、そこに何か気づきがあるかもしれない。

■WEBサイト

<http://www.rokuichi.16mb.com>

profile

2013年より活動開始、
インスタレーションを主な手法とし、
お互いの抱く「場」のイメージを基に実験、制作を行っている。

代 佑介

1986年 埼玉県出身

2012年 武蔵野美術大学建築学科卒業

田中 謙

1986年 新潟県出身

2010年 武蔵野美術大学建築学科卒業

■ 木内 祐子



■ 那珂湊松物語

私たちはいつも、何か目に見えないものに取り巻かれているように思う。それらは土地の人々の価値観や思想の蓄積だったりするかもしれない。そのような存在を、江戸時代から那珂湊を見守り続けている湊御殿の松の精として擬人化し、人々の前に現れるというフィクションを作成した。松の精は無条件に助けてくれたり、共通の財産として未来への発展のきっかけを与えてくれる一方で、おせっかいであるために、時にわずらわしさを感じさせたりする。けれど松の精が一生懸命なのは、人々が「那珂湊が好き」だからであろうと想像する。

出演:川崎達也さん、白土能史さん、飛田豪さん、松本真弓さん
ロケ地協力:稲葉屋菓子店、ひたちなか海浜鉄道那珂湊駅、明石屋安源七商店

■WEBサイト

<http://yukokinouchi.tumblr.com>

profile

1981年徳島県生まれ、大阪・埼玉・群馬・東京で育つ。
2008年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画研究領域修了、2011～13年四谷アート・ステュディオム、2014年ニューシネマワークショップ在籍。主にフィクションによる映像表現をとおりて、社会の構造と人々の生活との関係を探る。

■ ツチ屋 サユリ



「き、こえ。ないのは、誰か」

日本という国は、“みえないこと化”が浸透しやすい国だと思う。共同体としての協調性を重視し、個人としての存在や意見が目立つことは避けたがる。その精神は時に、出来事の本質をみえづらくさせてしまう。一体何がその精神を私たちの中に生み出すのか。みえなくなったものを、もう一度みることは出来るのか。

profile

インスタレーションを中心に映像やパフォーマンスを組み合わせた作品を展開。“みえないこと化”させる私達の意識に対してのアプローチを続けている。
2015年 多摩美術大学工芸学科卒業
現在 筑波大学大学院芸術専攻

■ 小山 和則



「飛梅・飛松伝説」(とびうめ・とびまつでんせつ)

「那珂湊」を象徴する湊公園の「松」と天満宮のシンボル「梅」を、「松竹梅」仲間の「竹」で表現します。

「天満宮」は、学問の神様「菅原道真公」を祭神とし、神紋は「梅の花」です。

「東風(こち)吹かばにほひをこせよ 梅の花 主なしとて 春な忘るそ」とは、道真公の有名な歌です。

「飛梅・飛松伝説」によると、この梅が、菅原公を追って九州まで飛び、太宰府に降り立ったとされています。

また、梅と共に飛び立った松は、途中で力尽き、神戸市須磨区にある飛松岡に根を下ろしたとのことです。

夏の展示期間中、この「竹の網」にかかった、木の葉や花びらや虫たちも、共に作品の一部となり、時の流れとともに、作品は変貌を続けます。

profile

千葉県出身。

早稲田大学理工学部建築学科卒業。

「場の魅力」をテーマに各地でインスタレーションを制作。

2006 国民文化祭・やまぐち2006「光と木・竹の造形展」

2010「きてみん！三河」アートの森

2011 六甲ミーツ・アート「芸術散歩2011」

2014 木津川アート2014

■ 對馬 尚

みなとを編む

漁の網を編んで、ローカル(局所的)な曲面を編みます

profile

東京生まれ。数学と編み物を往復しています。

2015年度SFC環境デザイン表彰横文彦賞受賞



■ サユリ ニシヤマ

Lead

この鎖は何処にあるのでしょうか。
この鎖は何処へと繋がっているのでしょうか。
この鎖は何を縛っているのでしょうか。
この鎖は何に縛られているのでしょうか。

profile

写真で飯が食えたらきっと美味しいと思います。
心理学科3年。



■ 松井 ゆめ



カモメをつくろう 2016

このワークショップは、「湊線沿線地域の恵まれた自然環境」「そこで暮らす人々」の間に作家が入り "土地の廃材<流木>" を用いて地域に根付く風景を再構築する事です。

海沿いを中心とした土地の魅力を改めて再発見し、

素晴らしい湊線沿線の風景を個々の記憶に浸透させることが目的です。

地域住民と作家がアートによって交流し、

共同の労働(制作)を通じてでしか得られない喜びこそが地域に根付くアートイベントの最大の役割ともいえるでしょう。

その感性を生む為のワークショップ(インスタレーション展示)にします。

profile

栃木県宇都宮市出身

流木、廃棄物、場所の特性を使って「記憶の再構築」をテーマにインスタレーション、彫塑、立体造形を制作。

野外展を中心に活動中。

楽しいスケッチ会

玉木繁夫「那珂湊駅」
堀留千恵子「岬」
伊藤昇「山上門」
綿引典隆「八幡宮」
田村仁美「駅」
浅野省三「那珂湊駅」
亀山巖「アクアワールド大洗」
和田明美「あずま台公園より那珂湊市を望む」
深澤弘義「山上門」
江島雄一「溪流」

profile

12年前にスケッチが掛けない仲間が菊地先生に出会い、
1回/月指導を受けています。
現在は23名と大人数になり、益々、元気に生き生きしています。
今回作品を発表するのは10名です。
6月にMMMに合わせ那珂湊で印象に残った場所を描き上げました。
現地でのスケッチ終了時には先生から上手く描くコツを伝授して貰います。



アートレイン (安田学園中学校、高等学校美術部)

ARTRAIN-アートレイン-

鉄道車窓から眺める移り変わる風景を、おさむ・ミニさむなどのキャラクターに透過させます。

profile

アーティスト伊藤由貴監修のもと、電車の窓に絵を描くプロジェクト「ARTRAIN-アートレイン-」を実施します。
このプロジェクトは昨年度に引き続いて2年目の企画となります。中学生高校生の元気溢れる作品をご覧ください。
2015年 みなとメディアミュージアム ひたちなか海浜鉄道賞 受賞



■ 白石 綾



あなたの隣

身の回りには様々な生き物が存在する。

私達は当たり前のように人を中心に世界を考え、行動するが、

他の生き物から見たとき、私たちは世界の一部でしかない。

あなた(と私)の隣にいるものと、その関係性について考えてみたいと思う。

■WEBサイト

<http://ayashiraishi.net/>

profile

1985 茨城県生まれ

2008 茨城大学教育学部情報文化過程表現文化コース卒業

粘土や金属などを用いた立体作品を制作

■ 蛭田 香菜子



夜空のカーテン

那珂湊の鉄道の枕木を用いた彫刻作品。

MMMへの作品制作に向かうにあたり、自然のような爽やかな作品を作りたいという気持ちで取り組みました。那珂湊の鉄道の枕木を使わせていただき、木のもつ個性と向き合いながら制作しました。

profile

1993年 福島県出身
2016年 茨城大学情報文化課程生活デザインコース卒業
現在、筑波大学博士前期課程人間総合科学研究科芸術専攻彫塑コース1年
これまで、鉋を用いた造形による木彫を制作発表してきた。
2016年1月 初個展「蛭田香菜子木彫展」(茨城県/ギャラリーしえる)

■ 森田 矩



「対峙した 場所」

20000×2928×3925

那珂湊に行き最も印象を受けたもの“列車”を題材としている。そして列車に対峙するものを今回の作品とする。

列車と向き合うように設置することで見る人は作品だけでなく列車も見つけることを目的とし、那珂湊について考えるきっかけづくりとしている。

profile

京都精華大学 立体造形コース卒業

■ 山本 大樹



episode

みなと線沿線地域で、3ヶ月間に渡って高校生のポートレイトを制作。現在この場所に生きる少年たちとの対話から、彼らの物語の断片を捉える。

profile

1991年 東京都生まれ
明治大学大学院理工学研究科新領域
創造専攻デジタルコンテンツ系修
了。写真の制作を行う。
2015年「BankART Artist in
Residence 2015」BankART
Studio NYK(横浜)
2016年 個展「Passage」
MUSEE-F(渋谷)

■ 小学校ワークショップ



43

BANKOKKI

運動会とかで万国旗を見かけると
なんだかワイワイやっている雰囲気がある
様々な国旗が空にヒラヒラと舞う情景は
誰しもわくわくとした気持ちが思い出されるのではない
だろうか
そんな万国旗のようなMMMの開催を表す目印を提案し
ます

profile

視点が変わったその先に在る『何か』。建築でもアート
でも…その『何か』を私たちは探し作り出したい。





小学校ワークショップについて

2016年6月30日にMMMによる那珂湊第一小学校でのワークショップを開催しました。小学校ワークショップは2015年に浅野代表が発案し、実施した学生スタッフ主体の企画です。

わたしたちMMMはこれからの那珂湊を背負う子どもと関わりたいと考えていました。アートを通じて子どもたちに豊かな感性を育んでもらうこと、まちに対する愛着を感じてもらうため、MMM参加アーティストと、スタッフが那珂湊第一小学校で子どもたちと一緒に作品を制作しました。これらの作品が、実際に街中に展示されることにより、地域と学校、子どもたちがアートを媒介としてより深くつながることができました。

企画の実現・継続にあたり、あたたかく迎えてくれた那珂湊第一小学校の児童のみなさん、先生方、心よりお礼を申し上げます。

中村 やす

那珂湊はいいぞ！

2016年6月30日に那珂湊第一小学校で行ったワークショップ作品である。5年生の児童に「那珂湊のいいところ、好きなところ」をフラッグに書いてもらい、商店街に展示する。子供の目線から見た地元のいいところを再確認し、愛着を持ってもらうことを狙いとしている。

なお、作者はガルパンおじさんである。「ガールズ&パンター」は隣町大洗が舞台じゃないかとおっしゃるかもしれないが、登場キャラクターにはひたちなか市出身という設定のキャラクターも複数存在するので関係ないわけではない。
ガルパンはいいぞ。

profile

大阪生まれ
筑波大学大学院芸術研究科デザイン専攻総合造形分野修了
常盤大学人間科学部コミュニケーション学科准教授
現代美術家
近年はワークショップを中心とした創作・プロデュース活動に移行しつつある



■ 那珂湊 DC ヘッドマークワークショップ



東京メディア芸術学部デザイン表現研究室 (小学校ワークショップ)



那珂湊第一小学校ワークショップにて4年生を対象に、木材合板とカラーフェルトを用いて立体的に制作する、ヘッドマークデザインワークショップを実施します。制作されたヘッドマークは、ひたちなか海浜鉄道の協力により、ワークショップ終了後と、今年の夏に開催されるMMM2016の期間中、営業列車に取り付けて走行します。

メンバー

渡邊哲也／成瀬由唯／坪井真子／峯岸実夢

宝塚大学植松研究室デコるファミリー (駅ワークショップ)



ひたちなか海浜鉄道のディーゼルカーの車内でヘッドマークを制作するワークショップを開催します。普段利用している列車の車内でヘッドマークを制作して、完成後は列車に取り付け走行します。いつもと違う列車で、夏のひとときにもものづくりを体験してみませんか？

メンバー

植松陽一／岩本茉弓／伊藤百花／大和田光紗／谷口慎／坪水彩乃／内田竜太郎

■ 四千の日と夜プロジェクト



なづけ・ワークショップ「なまえのスーパー」

夏休みのまちなかで、筆文字のオリジナル名札をつくってみよう！
みんなが大好きな場所も、普段は行ったことがない場所も、ベタベタ貼るとふしぎな景色に見えてくる。大人も子どもも大歓迎！筆を持って探検しよう！

■ Webサイト

<http://yukarisakata.com>

profile

第二次世界大戦後70年を経た2015年、演出家・坂田ゆかりを発起人として集まった20代～30代のアーティストによる長期創作プロジェクト。4000日のあいだに起こる出来事を、詩やさまざまな言葉に照らしてパフォーマンスを創造し、観客と作り手という立場を越えた思考の場を生み出します。

金井 啓太

laminate

私たちの認識する世界は、目の前の物事を自分の感覚器で受け止め、今まで獲得してきた経験や知識で分解し、再構成することで構成されている。

この作品では、そういった入力・分解・再構築の手順を行う装置を作り、物事を「認識する」ことで生まれる実体と認識とのズレや新たな意味を表現する。

演者を撮影した画面内の特定の画素のみを記録し続けるカメラは、1次元情報として記録された演者の動きを平面に再構成する。

再構成された平面は積層された映像となり、現実世界で営まれている動きの新たな側面を描き出す。

profile

筑波大学情報学群情報メディア創成学類所属

身の回りの物事の見方を変え、初体験を生み出すことを目指しています。



伊藤 沙織

かっぱのきもち

ちょっと上を向いて、ただ座っているだけの河童。

「何を見ているの？」と目を覗いて聞いてみる。

目の前を通り行く人を見送っているのか、空に浮かぶ雲の行方を見送っているのか。

誰かが来るのを待っているのか、雨が降るのを待っているのか…。

答えてはくれないけれど『となり、あいてるよ』とでも言いたそう。

ひとりでは一っと座っているのも好きだけど、いつ誰が隣に来てでも良いように、いつでも隣を空けてちょこんと座っている。

河童の見つめる先には何があるのか。何を感じ、何を考えそこに座っているのか。そんなことを想像しながら見てほしい作品です。

ぜひ隣に座ってそこに流れる時間を一緒に感じてみてください。

この作品を見た人がちょっと笑ってしまったり、優しい気持ちになれたらいいなと思いながら制作しました。

profile

多摩美術大学 美術学部 工芸学科 金属専攻 卒業



おさむシアター

グレートラビット



和田淳

1980年 兵庫県出身
東京芸術大学大学院アニメーション専攻修了
「間」と「気持ちいい動き」を大きなテーマに制作を続けている
『わからないプタ』(2010)で文化庁メディア芸術祭優秀賞
『グレートラビット』(2012)でベルリン国際映画祭短編部門で銀熊賞を受賞
大手前大学専任講師、大阪教育大学、京都精華大学非常勤講師

夏の女神の口の中



刘新新

1989年 中国大連出身
2012年 中国美术学院アニメーション学科卒業後来日
2016年 東京芸術大学大学院映像研究科アニメーション専攻卒業

まごころ? マスター



大山絵梨香

1992年 愛知県岡崎市出身
2015年 東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
現在、東京芸術大学大学院映像研究科アニメーション専攻在籍
長いブランクを経て制作活動を再開。イラストのお仕事に取り組みながらアニメーション制作を勉強中。

おもかげたゆた



大寶ひとみ

1988年 佐賀県出身
岐阜育ち
様々な手法を用いた映像やインスタレーションなどを制作。
2012年 武蔵野美術大学デザイン情報学科卒業
2016年 東京芸術大学大学院映像研究科アニメーション専攻修了

アンケート



木下絵津

福岡県出身
2014年 九州大学芸術工学部画像設計学科卒業
2016年 東京芸術大学大学院アニメーション専攻修了

WEB : <http://erikinoshita.com/>

だあれえ?



井上幸次郎

はじめまして、東京芸術大学大学院アニメーション専攻の井上幸次郎と申します。
横浜でアニメーションを制作しております。
「だあれえ」は短い作品ではありますが
落語を観るように肩の力を抜いて
気軽にお楽しみください。

おさむシアターとは

ケハ601という、1960年新潟鉄工製のステンレス気動車
が、映画館に大変身。
列車の座席に座って映画を楽しめるという唯一無二の空間が広がっています。
那珂湊駅の駅猫、おさむがモチーフ。某国民的アニメに登場するネコ型バスも同じような構造でしたが、とくに関係はありません。



受賞者一覧

大賞 「構造の表象」後藤 宙

選評

まず、作品として圧倒的。それは、細部の作り込みを含めた作品自体の完成度の高さや、蔵という空間をダイナミックに使っていたりと、まさにここでしかできない、見ることができない作品だと感じた。それだけでなく、この作品を鑑賞していると、作家自身が楽しんで作ったのだらう、ということも伝わってきて、見ているこちらにもすくわくわくした。ただひとつ言うなら、蔵と作品と(更に行くなら作家を含めた)の関係性は絶妙だったと思うが、那珂湊との関係性としては弱いところはあったかと思う。

しかしそういった弱さを凌駕するサイトスペシフィックな作品であることには間違いない。運営陣共に満場一致の大賞であった。

審査員特別賞 「halo003」ろくいち

選評

「那珂湊」に寄りすぎている作品が多い中、「作業部屋のそばの環七の音」という作家自身らのホームと「那珂湊」を対峙させたことに好感を覚えた。また、今回のテーマでもある「浸透」というテーマにも一番寄り添っていたのではないかと思う。

表現としては、波の音と環七の音が交差するさまや、光の波紋が音によって変わっていくさまは、見ていると宙に浮いたような不思議な感覚になった。そして、更に行くというそれが心地の良い空間を形作っていたと思うのだが、完全暗室ではなかったのが残念であった。

ひたちなか商工会議所那珂湊ブロック賞、 SSS(Special award from Students and Supervisor) 賞

「プラスチック プラクティス」白田 那智

ひたちなか海浜鉄道賞

「あなたの隣」白石 綾

おらが湊鐵道応援団賞

「カモメをつくろう 2016」松井 ゆめ

まちづくり3710実行委員会賞

「episode」山本 大樹

ドーナイトマーケット実行委員会賞

「き、こえ。ないのは、誰か」ツチ屋 サユリ

那珂湊焼きそば大学院賞

「飛松・飛梅伝説」小山 和則

みなとみらいプロジェクト実行委員会賞

「那珂湊松物語」木内 祐子

那珂湊本町通り商店街振興組合賞

「対峙した 場所」森田 柊

審査員総評

ここに来たのは作家として参加した初年度以来8年ぶりくらいだが、以前と変わらず町の方たちは温かく迎えてくれ、故郷に帰ってきたような気持ちになった。運営の学生たちもプロジェクトを円滑に進めようと色々な工夫をしながら頑張っていたように思う。また、蔵を使った作品展示は私の時には無かったので、空間の使い方含めてとても面白く見させて頂いた。

全体的な作品の印象としては、後藤さんをはじめとした、白田さんや、森田さんは、ダイナミックにここでしかないことを追求されていたと思う。やはり、こういったアートプロジェクトでは空間の使い方が鍵になると、改めて私も勉強になった。

少し厳しいことを言わせてもらおうとするならば、作家自らが選んだにも関わらず空間を上手く使い切れていないか、もしくは負けてしまっていたり、作品自体も全体的に小さくまとまっていた印象があった。もっとダイナミックに空間を使った作品が増えても良いと思う。また、審査員賞でも書いたが、「那珂湊」という場所にダイレクトに寄りすぎている作品が大多数を占めていた。地域のアートプロジェクトである以上、ある程度はその土地に寄せていくことは大事だが、それが大多数を占めようと、その地域外から来た鑑賞者は少々排他的な印象を受けてしまうのではないかな。特に小規模だと。最後に、駅から離れた作品がある中、そこまで行くという動線がわかりづらかったのも課題の一つであると思う。来年の作品はどうなるか、とても期待しています。

MMM2016審査員 海老原祥子

審査員 profile

海老原祥子

写真家・美術家

2009年 第1回みなとメディアミュージアム出展

2013年 キヤノン写真新世紀 優秀賞(清水稜選)

2015年 第19回文化庁メディア芸術祭審査委員推薦作品

MMM 同窓会 2016

みなとメディアミュージアムは8年目を迎えた。MMMは運営の中心を大学生が担っており、スタッフの大学卒業とともに代替わりをしながら継続している。8年の歴史の中で培った人のつながりをたどるため、2016年8月の会期中に、MMMに関わった多くの人を呼び、同窓会を行なった。那珂湊で初期から協力していただいている地域の素敵な方々、MMMに関わった多くの学生は社会人となり、現役スタッフとOBが世代や地域を越え、笑顔の絶えない会となった。

このつながりはこれからも私たちにとっても那珂湊にとっても大きな財産であることを確認し、この期待を次の代に受け継いでいくことを新たにしました。



MMM 過去 8 年の歩み

みなとメディアミュージアムは、2009年にアートと地域にそれぞれ関わる二人の学生が、廃線の危機を脱した直後のひたちなか海浜鉄道に話を持ちかけたところから始まった。那珂湊駅周辺中心での作品展示から、徐々に活動の場を広げ、街中に浸透していったMMM「地域を伝えるメディア」としてのアートが街を彩った。

2010年からは作品公募を開始した。玉田多紀氏の作品「よみがえる海竜展」は、海の家における制作過程に多くの地域住民が関わり、海の家は展示後に地元NPOによりリノベーションされ、活用された。

2011年、茨城、そして那珂湊も東日本大震災に見舞われた。しかし、ひたちなか海浜鉄道の吉田社長の「かまわなから来てください」という声によって活動を繋ぐことができた。震災復興と、那珂湊に活力を、の想いを抱き活動した。コンペティション制度はこの年より開始し、大賞の井口雄介氏による木を素材としたインスタレーション作品「CUB-e-SCAPE」は展示会期後、海岸で展示物をお焚き上げし、鎮魂の意を表した。

2012年にはMMMの展示をきっかけに那珂湊駅横の市民スペース「百華蔵」が活用され始めた。また、学生が中心となって実行した街中でのワークショップ企画は、常磐大学の団体M4が中心となり、毎月那珂湊で開催されるドゥナイトマーケットの活動を現在も継続して行っており、地域に根づくこととなった。学生が運営する「みなとカフェ」は展示の休憩所・展示場所として期間中オープンした。現在ではMMM2015大賞作家の田中彰氏が移住、カフェの運営を行いつつアトリエとして活用している。

2013年に「みなとハウス」という宿泊施設でのスタッフとアーティストの共同滞在がスタートし、アーティスト・イン・レジデンスの試みも行っている。

2014年には、野村在氏の「Broken Gallery」が地元の祭りの中で披露され、作品やイベントによる地域の接点为新たに生まれた。

2015年には那珂湊第一小学校でのワークショップ企画がスタートし、子どもたちとアーティストがともに作った作品が街中に展示された。ワークショップでの子どもたちの笑顔や交流は作家・スタッフにも大きな力を与えてくれている。

MMM初年度作品の駅名標のグッドデザイン賞受賞や産業交流フェアへの参加、いばらきイメージアップ大賞受賞、茨城デザインセレクション選定などにより、より密接な地域との連携も実現している。



チーフキュレーターから

「アートはまちを変えられる」この言葉は正しくないと思う。間違っているとは言わないが、あまりにも言葉足らずになっている。

言葉を補足すれば、「(地域における)アートは(体験者が作品と展示が示す土地の姿を見て、行動したときに)まちを変えられる(力を持つ)」のではないだろうか。これだけ補足をしなければ、アートでまちを変えようとは容易に発言できない。しかし私はアートが結びひとつひとつの関係に強力な力が内在していることを伝えたい。

みなとメディアミュージアム(MMM)はアートそのものが主役になるだけではなく、作品と作品制作・展示に関わるひとが那珂湊に入り込み、発信し続けていくことが重要になると考えている。2014年からMMMに関わるようになった私は、MMMの大きな特徴を伸ばしていくことを考えた。それは中心スタッフが大学生であることだ。

2009年の初開催から今まで、MMMは大学生が中心となって運営を行っている。もちろん那珂湊の方々、ひたちなか海浜鉄道をはじめとする企業や商店街からの篤い支援によって成り立っていることは言うまでもない。さらに去年からは那珂湊第一小学校にお世話になり、小学校内でワークショップを開催させていただいている。特に生徒に制作の楽しみを感じてもらえた小学校ワークショップは、代表の浅野が発案した試みで、素晴らしい結果を得られた。私やプロデューサーの中村といった教員スタッフは、ワークショップの中で実働や調整を担い、代表や他の学生スタッフのサポートに徹している。

これはMMMのすべての活動においても変わらず、テーマ設定や作家の選定、運営や広報などでも、学生スタッフが発案したものをどう実現するのか、参加作家が自らの力をフルに発揮するためにどのように場を整えるかという部分に私は力を尽くした。これはMMMという団体が、大学生を中心として那珂湊と作家とを結び成長していく姿も見せるところに、他の地域アートイベントとは異なる特徴があると感じているからである。

今年は学生キュレーションチームを作り、中心となったスタッフは本当に頑張っていた。参加作家も学生を相手に真剣に作品の想いや、制作の楽しみを語ってくれた。そんな忙しい中に、学生キュレーターが私に電話でこう言ってきた。「わたしはアートのことを知らないことがよくわかりました」、そして「だからもっと知りたいんです」と。

私は思わずガッツポーズをとった。嬉しい一言だった。

MMMのスタッフのほとんどは芸術を専攻しているわけではなく、また、那珂湊出身や在住者もほほいしない。しかし、那珂湊に深く関わろうとする気持ちを抱いて来ている。つまり、MMMに関わり始めたスタッフの目線は那珂湊の良さをアートを通じて知ろうとする好奇心を持った、MMMの来場者と同じなのである。学生スタッフが那珂湊を知り、参加作家との話し合いや交流、作品制作の手伝いによってアートの現場を知り、アートの楽しさや、目線の変化を体験することが、まず重要であった。自分たちが経験したアートとまちの繋がりを、来場者に体験してもらうこと。これは私から指示されたことをこなすことではなく、主体的に動くことでしか身につかないものだからである。知らないことを自覚して、知ろうとする学生キュレーターの姿勢は、他のスタッフにも伝播していった。

参加してくださった作家の皆様は、MMMを理解していただき、那珂湊に何度も何度も足を運び、土地やひとに浸透する制作活動を行ってくれた。「浸透」のテーマをもとに、27組の作家が個性豊かな作品を展示してくれた。「浸透」というと、静かに染み入るような、また寄り添うようなイメージがあるかもしれないが、大賞を受賞した後藤宙の言葉を借りると、「土地とセッションした」というように、正面から対峙することで発生したものがあつたように思う。

私個人としては、アートの強みとは、美しさに嘆息をつくことや安らぎではなく、鑑賞者の視点を変化させる力があることだと考えている。今年度の展示では、作家の多くがそれぞれのアプローチから、新しい視点を表現していた。本当は全作家について語りたいが、ここで留めておく。

みなとメディアミュージアムを動かしているスタッフが那珂湊の経験を糧にこれからの活動をすることで、文化芸術の体験をそれぞれの場所で深くつなげてほしい。

最後に、これを書いている最中に、大賞を受賞した後藤宙のTokyo Midtown Award 2016のグランプリ受賞の報告が入った。他の作家も精力的に様々な展示に参加されることを聞いている。私たちは関わってくれた作家や多くのひとが、みなとメディアミュージアムと那珂湊につながっていることを誇りに思うような活動にしていきたい。

MMM2016チーフキュレーター 橋口静思

プロデューサーから

MMMは2016年で8回目の開催となった。小規模低予算のアートイベントでここまで続いているものはあまりないのではないかと。ひとえに運営主体である学生たちの頑張りと地域の方々の協力の賜物である。また、MMMを盛り上げてくれたアーティストたちにも感謝したい。

私は2011年から参加しているが、始めは参加アーティストとして、その後運営側として関わることとなりもう5年になる。この間多くの学生・地域の方々・アーティストたちと出会い、多くの新しい刺激を受けることができた。少し若返ったような気がするのはいのちのせいだろうか。

少しでも興味を持ったらずばは観客として会場に足を運んで欲しい。そしてもう少し興味を持ったらずばMMMの運営に参加して欲しい。きっと新しい刺激があなたを待っている。

MMM2016プロデューサー 中村泰之

MMM2017、始めませんか。あなたも。

MMM2016が終わった。大事なことは他で言っていると思うので、創設者として言うことがあるならば、この一言ぐらいだろうか。記録集には、MMMの魅力が沢山載っているはずなので、私はMMMの「人の魅力」について語りたい。

MMMを作っているのは、地域の方々とアーティストと学生だ。MMMに参加すれば、この方々と密にやり取りを重ねることになる。中には、職場にはいないような人もいるはずだ。時には、厄介だと思われるかもしれない。しかし同時に彼ら彼女らは、自分の知らないことを知り、考えもしないことを考える。これが、刺激となり、楽しみとなり、そして自己成長の機会となる。そしてその積み重ねが、社会や地域を変えていくのかもしれない。

言い方を変えれば、こういった人々とのコミュニケーションこそMMMの魅力なのだ。私も引退した身ながら、これが楽しくて離れられない(ここだけの話、チーフキュレーターとプロデューサーを中心とする打合せと称した飲み会は最高)。

なお、この文章は、記録集を手にとった全ての人にに向けたものだが、ほんやりと那珂湊や勝田、水戸あたりに住んでいる社会人を想定している。

MMM創始者・MMM2016アドバイザー 田島悠史(宝塚大学専任講師)

MMM2017 に向けて

2016年の2回目の作家選定会議前日の、4月14日に熊本・大分地震が発生しました。私たちはまず「他人事ではない」という認識をスタッフで共有しました。2011年の3月11日以降のことも、2011年のみなとメディアミュージアム(MMM)の活動も忘れることはできません。各地で大規模な自然の脅威、那珂湊でも数回にわたる台風によって作品も被害を受けました。「みなとメディアミュージアム」の名称は、現代アートを中心に展示し、地域・アートそのものをメディアとして発信する意味を込めています。この名には、那珂湊の日常をアートによって少し視点を変えて想像力を喚起したいという想いがあります。過ぎた理想かもしれませんが、なにがあっても「他人事」にせず、対峙すること。アートと地域とひとの関係は、このようなところにつなげていく目標を抱えて、また一歩ずつ来年の夏に向けて動いていきたいと思っています。

9年目となる2017年のMMMはすでに動き出しています。2年間代表を務めた浅野嶺が引退し、代替わりの最中です。MMMは大学生が主体となって動く団体なので、新しいカラーで臨むことになります。しかし、来年のテーマや目指す方向性は、那珂湊とアートの魅力を参加作家、スタッフ、地域の方々が一丸となって磨き上げていくことは変わりません。

MMMは毎年新しいスタッフが続々と入ってきます。アートに興味があるひとといえれば、そうではないひとともいます。ですが、那珂湊という地域に興味を持ち、そして、好奇心が強いことは共通しています。そのようなスタッフが数ヶ月で大きく成長します。それは参加作家と那珂湊の方々と一緒に活動を行うからです。那珂湊のひとや土地に関係する作家の姿や、地域の方々や鑑賞してくださる皆様に暖かくも厳しく接していただくことで成長する姿はアートと地域の裏側のひそかな見どころです。ぜひ来年も青いTシャツの若者たちを見てください。

那珂湊の方々は冬も春もまたお世話になります。参加を考えてくださっているアーティストの方々、スタッフとして協力したいという方々、いつでもお待ちしております。

来年の八朔祭りで賑わうところに那珂湊でお会いできることを願って。

MMM2016チーフキュレーター 橋口静思

MMM メンバー

代表	浅野嶺 慶應義塾大学
プロデューサー	中村泰之 常磐大学准教授
アートディレクター	小野寺真央 宝塚大学大学院
チーフキュレーター	橋口静思 明治大学大学院・明治学院大学非常勤講師
デザイナー	小佐原孝幸 常磐大学・千葉商科大学非常勤講師
アドバイザー	田島悠史 宝塚大学専任講師

学生メンバー

慶應義塾大学
 石田剛(副代表) / 小林颯 / 田口茜 / 竹澤亜矢子 / 江口未沙 / 八木進 /
 高田彩加 / 佐々木芽衣 / 則竹桃実 / 竹田千晃 / 伴野綾 / 比留川路乃 /
 / 金子晴菜 / 新納圭太 / 日下真央 / 佐野虎太郎 / 荒木晴香 / 堀佳恵

早稲田大学

清水栄伸

常磐大学

発行 みなとメディアミュージアム実行委員会
 発行日 2016年11月6日
 編集 橋口静思 中村泰之 山本大樹

写真 山本大樹 サユリニシヤマ 船越知弘

デザイン 中村泰之

印刷 株式会社グラフィック

明治学院大学

山越香里 / 山岸遥菜 / 竹川優花 / 赤沢美月 / 前田英理香 / 原愛美

宝塚大学

小野寺真央 / 長谷響美

千葉大学

松岡由香利

常磐大学サークルM4

嘉悦大学フードビジネスゼミ
 茨城県立海洋高等学校水産クラブ

社会人メンバー

緒方伊久磨	慶應義塾大学大学院修了
岡田佑亮	慶應義塾大学卒業
笹島亮太	常磐大学卒業
草野正志	常磐大学卒業
吉田千秋	ひたちなか海浜鉄道株式会社取締役社長
伊藤敦之	ひたちなか商工会議所
打越謙治	ひたちなか商工会議所
佐藤彦三郎	おらが浜鐵道応援団長
星秀憲	おらが浜鐵道応援団
船越知弘	おらが浜鐵道応援団
川崎達也	かわさきクリーニング
窪田弘実	関東鉄道
横須賀靖	横信建材工業株式会社
上田良隆	ビルダー株式会社
藤咲英史	みなとみらいプロジェクト実行委員
大川恵介	大川商店
黒澤仁晶	MMM2014審査員賞受賞作家

みなとメディアミュージアム

website <http://minato-media-museum.com/> E-mail minato.media.museum@gmail.com

Twitter @minatom_m Facebook @minato.media.museum

